

「LMA構想」から学ぶもの②

前回に続き「丸善ライブラリーニュース」(第11号)の特集『「アーカイブズの今」MLA連携が模索する』について、今回は岡野裕行「MLA 連携における図書館と文学館」(岡野氏は法政大学キャリアデザイン学部兼任講師)という論考を取り上げます。

この論考での岡野氏の関心は、文学資料アーカイブズの体系的な保存と適切な公開をいかに実現するのかという点にあります。「文学資料アーカイブズ」とは、「それぞれの地域ゆかりの文学作家が遺した手稿資料(直筆原稿や書簡など)や遺品のような、一点ものの文学資料の類」をいいます。論考によると、文学資料アーカイブズの保存・公開は、これまで主に公共図書館や大学図書館に限られていましたが、1990年代以降は専門施設としての文学館(=文学の専門図書館)の活動が活発になってきました。しかし、ここ数年は主に財政上の理由などから、文学館の休館・廃止や図書館等との移転統合などが行われる事例も出てきました。こうした状況について岡野氏は、「いわゆる MLA と称される施設のすべての性質を有するがゆえに、文学館はその立ち位置を明確化することが難しく、活動の方向性を探ることも容易ではない」と述べています。では、文学館に対するこの指摘は、LMA(図書館・博物館・アーカイブズ)のアーカイブズに対しても当てはまるのでしょうか。

前号でも述べたように、LMAは互いに有機的な連携関係を構築するのにふさわしい機能をもっていると考えられます。これは、それぞれが他のものの機能を代替する関係ではないという点で、融合とは異なるものだといえます。例えば、2002年10月にカナダでは国立図書館(NLC)と国立公文書(NAC)を再編して国立図書館・文書館(LAC)が発足しました。そのねらいは、「電子革命」(図書とアーカイブズのデジタル化)への対応、図書館と文書館の補完的関係の強化、司書とアーキビストの能力の集約、単一施設化による利用者の利便性向上にあるとされています。この事例はLMA構想の一形態(LA連携モデル)であるといえますが、こうした図書館と文書館の有機的な連携は日本においても比較的受け入れられやすいものであるのかも知れません。



カナダ国立図書館・文書館(LAC)